（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏　名　　鉄野（てつの）　昌弘（まさひろ）

本論文は、『万葉集』の末四巻を大伴家持の「歌日誌」として把握することで、そこに現れた家持の作歌方法をさまざまな角度から具体的に明らかにしようとした論である。末四巻の形成過程については、家持の関与のありかたをめぐって諸説あるが、本論文は末四巻全体を統御する家持の意志が明確に存在したことをつよく主張している。

全体の構成は、「第一部　詠物歌の方法」「第二部　「名」と無常」「第三部　「歌日誌」配列の方法」の全三部十四章からなる。なお、冒頭に「総論　家持「歌日誌」とその方法」を置き、第一部と第三部にそれぞれ三篇ずつの補論を配する。

第一部は、従来、先行歌の表現の踏襲・模倣が目立つとして、低い評価しか与えられていなかった家持の作の再評価を意図する。先行歌の表現を摂取する中にも、家持独自の方法が現れており、とりわけ六朝・初唐の詠物詩の手法を積極的に取り入れたところに斬新さが現れていることを、細部にわたる徹底した読みを通じて具体的に明らかにしている。「叙景による抒情」が、家持の内面といかに深く関わって達成されていったのかが、これによってあらためて明確になった。これまでの否定的な評価に大きく楔を打ち込む、きわめて刺激的な考察といえる。

第二部は、「賀㆓陸奥国出金詔書㆒歌」「喩㆑族歌」などに頻出する「大伴の名」「祖の名」の根底にある家持の意識について論ずる。従来、佐保大納言家の嫡流である家持の氏族意識の発現として論じられることが多かったが、本論文は、「名」の無限の継承を歌うことが、実はそれを継承する個々の有限性への自覚を前提にしており、それゆえに作中にしばしば露呈する「世間無常」の観念とも矛盾しないことを明らかにしている。これまで、「大伴の名」への徹底したこだわりと「世間無常」の観念とが同一歌群中に併存することの不思議さがしばしば問題とされてきたが、本論文はそれに対する見事な解答を呈示しており、今後の研究に裨益するところまことに大きい。とくに「古代のナをめぐって」という一章を設け、歴史学の成果を参照しつつ、古代における「名」の意味の検討を根本から行っていることは、本論文の推論の確かさを側面から保証するものといえる。

第三部は、「歌日誌」配列の方法に説き及んだ論だが、とりわけ巻十九を対象として、巻頭歌群と巻末歌群との照応の様態を明らかにした点が注目される。すなわち、巻十九に歌われた内容は、巻末の「春愁三首」に示された孤愁に至るまでの軌跡を描いており、そこに「歌日誌」を編纂する家持の意志が明確に現れているとする。きわめて卓抜な把握であり、末四巻の形成をめぐる議論に大きな示唆を与えるものと評価しうる。さらに、「春愁三首」の分析の中から、「興」の問題が引き出されていることも注意される。家持歌の題詞や左注に見える「興」については様々な議論があるが、本論文ではそれを景物に感じ惹起される心とし、その時節によって刺激・触発されて発動するものと捉える。異論の余地はあるものの、これまでの見方を一歩進める意味をもつ理解といえる。

本論文は、先行研究への充分な目配りをもち、また中国詩文の影響も、資料の博捜を通じて丹念に跡づけられている。作品の分析も緻密かつ犀利で、全体としてきわめて重厚な論に仕上げられている。考察の対象を末四巻に限定したため、相聞歌を中心とする私的な歌々に言及できなかった点は惜しまれるが、本論文の成果は、今後の家持研究を導くすぐれた指標となりうる。よって審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。